

学部新入生の皆さん、そして大学院に入学された皆さん、ご入学おめでとうございます。

この歴史ある武蔵学園大講堂で式典に参加していらっしゃる皆さんにも、ご父母の皆様や関係者の方々にも、またオンラインで、この入学式をご覧になっている皆様にも心からお祝いを申し上げます。

この大講堂は、日本最初の私立七年度制高等学校である旧制武蔵高等学校の一期生の卒業式に向けて、一九二八年、昭和三年に建設されました。今年で築九六年になります。設計は日比谷公会堂などを手がけた、当時を代表する建築家である佐藤巧一によるもので、練馬区に現存する最も古い鉄筋コンクリートの建造物である本学の三号館とともに、練馬区登録文化財に指定されています。

二〇二〇年二月以降の新型コロナウイルス感染症の拡大によって、私たちの生活は一変しました。このたび、学部に入学者される皆さんの多くは、中学三年生になる年がコロナ元年でした。高校に入学者された後も、最初のうちはコロナ禍のもとで過ごし、頭に思い描いていた高校生活を実現できなかった人も多かったと思います。

この入学式も、四年前は、直前に中止を決定しました。その後の二回の入学式は大講堂で行うことはできませんでしたが、ご父母の皆様を大講堂にお招きすることはできませんでした。

昨年からやっと今のかたちになり、昨年の入学式ではほとんど散ってしまっていた桜も、今年も川通りやキャンパスで咲き始める中、池田学園長、矢田大学同窓会会長、そして父母の役員代表として蒔山副会長、田村副会長にもご臨席いただき、こうして皆さんと対面して、共に入学式を挙行できますことは、教職員一同にとっても望外の喜びです。

以後、この式辞は、学部入学生の方々に対象にお話しさせていただきますので、大学院に入学された皆さんは、自らの身に置き換えて、お聞きくださるようお願いいたします。

武蔵学園は一昨年、創立百周年を迎え、次の百年に向けて歩み始めているところですが、皆さんも大学に入学され、未来に向けて歩き始める前に、ぜひ、武蔵学園、武蔵大学に深く関わった人たち、その発展に大きな貢献をされた人々と、時間を超えて深く交わっていただき、その交流や対話を通して、学びの意欲、知への探求心を深めてほしいと思います。

皆さんから見て右前方の一番奥の壁面上には、旧制高等学校初代校長の一木喜徳郎(いっききとくろう)の肖像画があります。そこから右の壁面、そして左の壁面にかけて、旧制高校の歴代校長、大学開学後の歴代学園長の肖像画が飾られています。

最も新しい肖像画は、こちらは皆さんの左手前方にあります。二〇二〇年十二月に亡くなられた、前の学園長である有馬朗人（ありま あきと）先生のもので。有馬先生は、武蔵高校を卒業後、東大総長、文部大臣を務められ、二〇〇六年から学園長として、常に未来を見据え、その中で、文理融合やリベラルアーツ&サイエンス教育など、武蔵大学の教育が進むべき道を示してこられました。皆さんがこれから受ける教育にも有馬先生の想い、メッセージが込められていることをぜひ知っていただきたいと思います。

もう一度、右前方を見ていただくと、初代校長一木喜徳郎（いきき・きとくろう）の肖像画がありますが、その隣にある肖像画は第二代校長である山川健次郎のもので。

山川健次郎は、福島のお津藩士の三男として生まれ、幕末から明治初年に起きた会津戦争の時には十代の少年として戦火の中を生き抜きました。その後海外留学を経て、学問の世界に入り、東京帝国大学や京都帝国大学の総長を経て、旧制武蔵高等学校の第二代校長に就任されています。皆さんには、山川健次郎を通して、ぜひ江戸時代ともつながっていただきたいと思っています。

また、少し見にくい場所になりますが、皆さんの左手の手前には、第二代学園長である太田博太郎（おおた・ひろたろう）の肖像画があります。

太田博太郎は、日本建築史の大家で、町なみ保存運動の先駆けとなった中仙道の宿場町であった妻籠の町なみ整備に大変な貢献をされました。今、日本全国のさまざまな地域で町なみ保存運動が展開されていますが、その先鞭をつけたのが、第二代学園長であった太田博太郎です。

武蔵学園、武蔵大学の歴史をもう少し続けます。武蔵大学の前身である旧制武蔵高等学校は一九二二年、大正十一年、関東大震災の一年前に設立されました。設立したのは、幕末の甲斐の国の正徳寺（しょうとくじ）村、今の山梨県山梨市になりますが、その正徳寺村の豪商の子として生まれた根津嘉一郎という人物です。鉄道王とも呼ばれ、東武鉄道の礎（いしずえ）を築きました。また、南青山にある根津美術館は、その根津嘉一郎の古美術コレクションを引き継いだものです。

根津は、明治四十二年に、渋沢栄一が率いる渡米実業団に参加し、アメリカ合衆国を一周してきます。アメリカ滞在期間に、アメリカの各地で実業家が、自分の財産を社会に還元する目的で、学校や図書館、そして美術館をつくっているのを目のあたりにして、強い感銘を受けます。そして帰国後、根津育英会を設立し、武蔵高等学校をつくりました。

その旧制武蔵高等学校には建学の三理想という教育方針があり、武蔵大学の教育は、その三理想という岩盤の上に築かれていますので、この三理想についても少しお話をします。

その三理想とは、第一に、「東西文化融合のわが民族理想を遂行し得べき人物」、第二に、「世界に雄飛するに耐える人物」、第三に、「自ら調べ自ら考える力ある人物」を育てることです。

東西文化融合は、古くは、ひらがなやかたかなの誕生もそうですが、明治維新後、私たちは西洋からさまざまなことを学びながら、日本独自の文化や技術を作り出してきました。固有の文化や技術を、新しい文化や技術に融合する能力は、明治時代に日本を訪れた多くの外国人が認めるものでした。

世界雄飛は、旧制武蔵高等学校が設立される四年前に、第一次世界大戦が終わったことを思い出してください。国際問題は、もはや日本とアメリカなどの二国間で解決できる範囲を超え、文字通り、世界規模で対応しなければならぬ時代になりました。それをいち早く取り入れた建学の理想といえることができます。

自ら調べ自ら考えるは、正解は他者から与えられるのではなく、自分で導き出さなくてはいけないという厳しい時代を生き抜くために、どのような力が求められるのかを表したものと考えられます。

このように、百年以上の年月を経ても、建学の三理想は、色あせることなく、現代に通じるものがあります。

そして、武蔵大学は、この建学の三理想を受け継ぎ、次の百年に向けて、教育の基本目標を新たに策定しました。それが、世界に開かれたリベラルアーツ&サイエンスの学園を目指すということです。

リベラルアーツとは一般教養と専門の区分を超えた総合的で分野横断的な教育を意味し、サイエンスは数学・統計学などの数理科学、物理学などの自然科学、経済学などの社会科学を指しています。

今日、私たちを取り巻く環境を見渡すと、私たちが解決しなければならない課題に満ち溢れています。そして、今、私たちの前にある課題を解決するには一つの学問領域だけでは歯が立ちません。

例えば少子高齢化を解決しようとした時に、皆さんはどのようなアプローチをするでしょうか。医学の力が一番大切と主張される人もいれば、正確な情報把握のために統計学が必要という人もいます。いや、そうではない、やはり安定した雇用の確保が一番なので経済学の重要性を説く人もいます。また、社会学の役割を強調される人もいます。文学や歴史の中にこそ大切なヒントが隠されているという人もいます。かもしれません。

一つの正解があるわけではありませんが、強いて言えばすべての学問領域を総動員して解決しなければならぬ問題であり、これは少子高齢化の問題に限ったことではありません。

このような時代にあつて私たちが求められる能力とは、専門知をしっかりと身につけ、異なる専門知をつなげたり融合したりできる総合知、そして専門知と総合知を実際に社会に役立てるために必要な、他者と協働する力であり実践する力です。

武蔵大学のリベラルアーツ&サイエンス教育とは、専門知、総合知、他者と協働する力、そして実践力をバランスよく身につけることを目標とした教育と言い換えることができます。

そのために、武蔵大学はゼミナール教育を教育の柱にしながら、リベラルアーツ&サイエンス教育センターが中心となり、自然科学や身体運動科学などの授業を受けられる機会をつくり、また他の学部が開講している授業も受けられる制度を設けています。

また、グローバル社会で生きるための力を磨く機会も豊富であり、その代表的なものが、交換留学制度です。武蔵大学は、現在、十四か国・地域に三十四校の海外協定校があり、今年中には、ベルギーやアメリカ西海岸、そしてドイツ国境にあるフランスの大学と新たな協定を結ぶ予定です。

交換留学制度を利用されると、卒業を一年遅らせることなく、先方への授業料も免除され、海外留学ができるというメリットがあります。奨学金も、武蔵大学学生国外留学奨学金が用意されています。

武蔵大学は施設の充実にも力を入れています。東門を入つてすぐの右手には、ラーニングコモンズとグループスタディーズルームを備えた十一号館が、一昨年四月から使えるようになりました。隈研吾が設計する食堂を備えた建物は、現在建て替え工事に入り、来年の夏には素晴らしい施設として生まれ変わります。

これから、皆さんは、知の世界へと旅に出かけることになります。ただ、その前に知っておいて欲しいこと、私からお伝えしたいことが一つあります。

それは、逆説的なことを申し上げることになりますが、知的活動を前に進める、ある方角に進めていく力は必ずしも知的能力ではないということです。

病気で大切な人を失った悲しみが医学の学びの原動力になったり、沖縄の美しい海に魅了されたことが珊瑚の研究を始めるきっかけになったりすることがあります。

それは感情的な、一種の直観と結びついたものであり、その感情が弱まると、知的世界を展開させる原動力も弱体化します。

これは知の巨人と言われた、日本を代表する国際知識人である加藤周一がある対談で語っていたことですが、とても印象的な言葉として私の心に残っています。

知の世界の旅に出かけると知識が増えます。しかし、知れば知るほど、学べば学ぶほど、不条理や怒りを感じることも多くなるでしょう。地域経済を学んでも、自然破壊という現実や、止めることができない人口減少に直面することがあります。福祉経済学を一生懸命に学んでいる時に、両親と一緒に住めない何万人の子供の存在を知り、学問の無力さを痛感することもあるかもしれません。

学ぶ過程で、怒り、悲しみ、よろこびを感じてください。感情がしみ込んだ知識をぜひ身につけてください。怒りながら学ぶ、感動しながら学ぶ、知識の背後にはリアルな世界が横たわっています。そうした学びが皆様の知的活動をより一層前に進めることになり、武蔵大学の教育の基本目標である、他者と協働する力や実践力を養います。

武蔵大学の四年間で、感情のしみ込んだ知識を学んでください。このことを申し上げて、私の入学式の式辞とさせていただきます。

本日はご入学、誠におめでとうございました。

令和六年四月二日

武蔵大学長 高橋徳行